

第二節 拡大された規模における再生産にかんする

経済学の謬見（間違った意見、見解）

第2節では、古典派経済学は資本の蓄積にかんする説明において、一方では確かに前進したが、他方ではそれ以上に大きく後退をしていることを述べている。

138 頁 11

・アダム・スミス、リカードが資本蓄積の使徒と呼ばれるように彼らは、資本家の浪費を戒め、節約を説き、収入のできるだけ多くを生産的労働者の雇用に支出することを強調した。

・また蓄積と貨幣の退蔵を混同し、あるいは蓄積と売れ残りの商品蓄積とを混同した、通俗的な偏見を批判する。

139 頁後 2

・これらの点では確かに彼らは、正しかった。しかし、彼らの誤謬もまたここから始まる。

140 頁 1

「…は、蓄積を単に生産的労働者による剰余生産物の消費として説明すること、あるいは、剰余価値の資本化を単に剰余価値の労働力への転換として説明することを流行させた。」

・アダム・スミスは、生産的労働を強調するあまり、追加資本はすべて追加労働力の購入に支出され、賃金すなわち可変資本のみに投下されると説明をした。

140 頁後 1

「…は、根本的に間違った分析によって、各個別資本は不変的構成部分と可変的構成部分とに分割されるが、社会的資本は可変資本のみに解消される、すなわち労働賃金の支払いにのみ支出される、という不条理な結論に到達する。」

・アダム・スミスは、個々の資本については不変資本部分の存在を認めながら、いざ社会的資本となると、不条理な結論に到達する矛盾。

第三節 剰余価値の資本と収入とへの分割。節欲説

143 頁 2

- ・単純再生産を考察した前章では、剰余価値は資本家によって全部消費されるものと考え、また蓄積を扱う本章では、これまで全部資本に転化されるものと考えた。
- ・しかし、実際はそのどちらでもなく、剰余価値の一部は資本家によって収入として消費され、他の一部は資本として蓄積される。

143 頁 10

- ・そこで、もし剰余価値の量が一定であれば、これら二つの部分の大きさは、一方が小さいほど他方が大きい関係となる。取り巻く事情が不変であれば、蓄積の大きさは、この分割がどんな比率で行われるかに左右される。だが、この分割を行うのは資本家であって、彼の意志行為（意志如何）による。

143 頁後 1

- ・もちろん資本家も人間であるという意味では、享樂の欲望を持っている。しかし、彼が歴史的（資本主義的）価値と存在権とをもちうるのは、彼が人格された資本であるからにすぎない。“資本の人格化としての資本家”

144 頁 3

- ・その限りでは、彼を突き動かす推進的動機（根本の動機、みなもと）は、使用価値と享樂ではなく、交換価値とその増加である。しかも競争が、これ（交換価値とその増加、人類に生産のための生産、社会的生産諸力の発展、物質的生産諸条件の創出）を彼に強制する。
- ・資本主義的生産が発展すれば、自分の資本を維持するため絶えず資本を増大し、蓄積を推し進めることが強制される。彼は生産のための生産、社会の生産力の発展を強制され、価値増殖と資本蓄積の狂信者となる。

144 頁 8

- ・貨幣退蔵者にあつて個人的狂癡として現れるものは…高利貸・守銭奴の禁欲性。

146 頁 10

- ・古典的な資本家は、資本蓄積に対する個人的消費を、自己の職分（職務上の

務め、役目)に対する罪悪と考え、蓄積に対する「抑制(押さえ止めるもの)」だと考えた。その意味では「禁欲的」。

- ・だが、資本主義的生産が発展し蓄積が進むに従い近代的資本家は、単なる資本の化身、価値増殖の狂信者であることをやめ、熱狂的な禁欲(古風な貨幣退蔵者)を哄笑・嘲笑するようになる。

- ・すなわち、近代化された資本家は蓄積を、自分の享楽衝動に対する「節制(欲望におぼれ度を越すことがないよう、適度につつしむこと)」だと考えるようになる。

147 頁 1

- ・しかし資本主義的生産の進歩は、単に享楽の世界をつくり出すのみではない。それは投機と信用制度をもって、突然の致富の幾多の源泉を開く。

- ・というのは、第一に奢侈は、資本にとって必要となる(される)。奢侈は、富の誇示(ステータス)であり、信用を得る手段でもある。資本家仲間の贅沢は、営業上の必要、交際費の一部にもなる。

- ・第二に、彼の獲得する剰余価値が著しく増大した結果、蓄積と同時に享楽(欲望)も拡大・増大させることになる。資本家の胸中は、蓄積の衝動と享楽、放蕩の衝動(ふたつの霊・欲望)が併存し、せめぎ合い、葛藤するようになる。

149 頁 1

- ・この葛藤の中で、資本の人格化としての資本家を究極的に支配するのは、蓄積せよ、蓄積せよとの命題。

- ・古典派経済学は、ふたつの霊(欲望)の内、もっぱら蓄積衝動を代弁した。

- ・しかし、興隆する資本の代弁者らしく、彼らの公式は、蓄積のための蓄積、生産のための生産であった。労働者は剰余価値を生産する機械であり、資本家は剰余価値を増加資本に転化するための機械と考えられた。視点の違い。

- ・例えば、資本家には蓄積の情熱を、地主(土地貴族、教会等)には浪費の情熱を、という珍妙な分業を説明したのはマルサス。

151 頁 8

- ・利潤は12時間労働の最終の1時間で生産されることを発見したシーニョアは、労働と資本という表現を労働と節欲という表現にすり替える。

152 頁 2

- ・労働過程のすべての条件が、資本家による、それだけの節欲実行に転化される。資本の蓄積は、資本家の「節欲」に依らなければ行えないと主張。